



香曾我部義則先生の今月のカルテ ⑦6

慢性痛とペインクリニック

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生が、痛みの治療について説明してくれるコラム。今回は、腰椎（ようつい）のずれから痛みが生じる「腰椎すべり症」の痛みの治療について話をしてくれます。

■プロフィール こうそがべ・よしのり 昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に。平成16年から現職。日本麻酔学会指導医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

痛みに応じて鎮痛薬、トリガーポイント注射、ブロックなどで除痛。安静時にも痛みが続く場合は手術の考慮も

腰の椎体が前方にずれ、運動は水中ウォーキングなどが良いでしょう。痛みに対しては、安静を保つと同時に非ステロイド性消炎鎮痛薬の内服が効果的で、簡易コルセットの使用や理学療法も有効です。

今回のテーマである痛

みの治療については、痛みが強く、また長引く場合には、痛みを免ずる部位へのトリガーポイント注射が筋筋膜性疼痛（どう）痛に有効です。また、すべりによる椎間関節の不安定化と変性による椎間関節痛には透視下での椎間関節ブロックが有効です。

この時期は、長時間の立ち仕事、歩行、運動は避け、体重のコントロールを心掛ける必要もあり、腰痛が主体です。

椎間関節のブロックが一次的で再燃する場合は、椎間関節の痛みを伝える脊髄後枝内側枝を焼灼する高周波熱凝固法が有効です。すべりが進行すると、硬膜外ブロックは痛みにはすべりの部位に応じた仙骨硬膜外ブロック、腰部硬膜外ブロック

を行います。硬膜外ブロックは痛みの悪循環を断し、神経の腫れを引き、痛みを減少させます。硬膜外ブロックの効果は一次的で乏しければ、大腰筋筋溝ブロックや神経根ブロックを行います。もちろん神経根症状以外の腰痛にはトリガーポイント注射や椎間関節ブロック、高周波熱凝固法も併用して除痛を図ります。

しかし神経根型と違い、安静時にも症状が続く、筋力低下、残尿感や頻尿、尿失禁といった膀胱腸障害にはブロック治療は効果が乏しいのが現状。神経障害性疼痛に準じた治療法である内服治療、点滴治療を行います。手術療法も十分考慮する必要があります。

この欄のお答えは、梶木病院（北区西花尻）の香曾我部先生です。088-622031000